

一本足の兵隊

鈴木三重吉

青空文庫

一

或^{ある}小さな坊ちゃんが、お誕生日のお祝ひに、箱入りのおもちやをもらひました。坊ちゃんは、さつそくあけて見て、

「やあ、兵たいだく。」と、手をたゝいてよろこびました。そしてすぐに一つ／＼とり出して、テーブルの上にならべました。それは青と赤の服を着た、小さな鉄砲をかついだ、小さな錫^{すず}の兵たいでした。すっかりで、ちようど二十五人ゐました。

これだけの兵たいは、もと、おもちや屋が或一本の錫のさじをつぶしてこしらへたので、言はゞ同じ血を分けた兄弟でした。そ

れがみんなちゃんと氣をつけをして、まつ正面をにらんで立つてゐます。

ちよつと見ると、二十五人が、寸分ちがはない同じ兵隊のやうに見えますが、しかし、よく見ると、中にたつた一人、足が一本しかない兵たいがゐます。これはこしらへるときに、一番しまひで錫が足りなかつたのでした。

でもその兵たいは、一本足のまゝ、ほかの兵たいと同じやうに、まつすぐに立つてゐました。

テイブルの上には、そのほかに、まだいろんなおもちやがどつさりならんでゐました。その中で人の目をひく、一ばんきれいなおもちやは、ボール紙で出来た立派な西洋館でした。その部屋／

“\の窓は、ちゃんと切りぬいてあつて、のぞくと部屋の中がすつかり見えました。それから正面の入口のまん前には、ひくい青い立ち木にかこまれた円い池があります。その他は鏡で出来てゐるのでした。その中には、いくつかの蠟ろう細工の小さな白鳥が、水に影をうつしておよいでゐます。それはまつたくきれいでした。

しかしその他よりもまだもつときれいなのは、入口の石段の上に立つてゐる女の人でした。それはボール紙を切りぬいてこしらへたのですけれど、それでも着物は上等のいゝ布きれで出来てゐて、くびから肩へかけて、細い青いリボンの襟えりかざりがつけてあります。その襟かざりは、きら／＼した金紙でこしらへた、その女の人の頭ほどもあるやうな、大きなばらの花で胸のまん中に止めて

あります。

その女の人が、両腕をひろげ、片足を思ひきりたく蹴^け上げて、
お得意の踊^{をどり}ををどつてゐるのです。その上げた片足は、顔よりも
もつと上まではね上つてゐるので、ちよつと見ると、片足がどこ
にあるのか分らないくらゐでした。一本足の兵たいは、この女の
足を見ると、

「おや、あの人も一本しか足がないや。なるほど、世の中にはお
れ見^なたいな人もゐるんだね。よしよし、おれはこれから、あの
と仲好^{なかよ}しにならう。しかし、向うはあんな立派な西洋館に住んで
ゐる女だ。おれのやうなこんな家^{うち}ぢや、いらつしやいと言つても
中々来ないだらうね。おれは二十五人も一しよに、こんな、いや

な箱の中にあるんだもの。」

一本足の兵たいは、じぶんのお家^{うち}になつてゐる、もと巻煙草^{まきたばこ}のはいつてゐた箱^{うしろ}の後に立つて、背のびをして、その女の踊を見
てゐました。女の人是一本足のくせに、ころびもしないで、上手
につりあひを取つて立つてゐました。そのうちに夜になりました。
ほかの二十四人の兵たいは、みんな箱の中へはいりました。家中^{うち}
の人もみんな寢床にはいつて寝てしまひました。

すると、テーブルの上のおもちやたちは、そろ／＼動き出しま
した。中にはのこ／＼人のところへ話しにいつたり、おほぜいで
踊ををどつたり、さうかと思ふと、けんかをし合つたりして、お
ほさわぎをしはじめました。

錫の兵たいたちは、箱から出ようと思つて、どたばたあばれました。しかし箱のふたが中々持ちあがりません。

こちらでは小さな紙切かみきりナイフが、ばねじかけの蛙かへるにふざけてゐます。石盤の上では、石筆がころ／＼走りまはつてゐます。その物音で、籠かごのなかのかなりやも目をさまして、ちい／＼と謡うたをうたひ出しました。

そんなさわぎの中で、れいの踊の女の人と、一本足の兵たいだけけは、だまつて身動きもしないでゐました。女の人は両腕をひろげ、片足をはね上げたまゝ、石段の上にちいつと立つてゐます。一本足の兵たいは、その踊手をどりての顔をぢつと見つめたなり、まっすぐに一本足でつゝたつてゐました。そのうちにお部屋の時計が

十二時をうちました。

それと一しよに、煙草の箱のふたが、ひとりでぴよんととびあいたと思ひますと、中から、まつ黒な鬼のおもちやがぬつと顔を出しました。

「おい／＼一本足の兵たい、おまへは何をじろ／＼見てるんだい。柄でもない。よせ／＼。だれがお前なぞと仲よしになるものか。」
黒い鬼はかう言つて鼻で笑ひました。一本足の兵たいは、鬼のいふことなんかちつとも聞えないやうに、平気で踊を見てゐました。

「ふゝん、勝手にしろ。だが明日^{あした}の朝になつておどろくな。」

黒鬼はそれを見て、ぷん／＼怒つてかう言ひました。

二

そのあくる朝が来ました。

坊ちゃんはこのくく出て来て、れいの一本足の兵たいをお部屋の窓のところへ立たせました。すると、それは黒鬼のしたことか、それとも風のせいか、その窓のがらす戸がふいにがたんとはねあきました。そのはずみに一本足の兵たいは、いきなりぽんとはねとばされて、その三階の窓から、下の往来の石だたみの上へ、まつさかさまに落ちました。くるくく、すどん。

「おゝ、いたゝ。」

兵たいのかついでゐた鉄砲の先は、しき石の間へぐいとききさゝりました。坊ちやんは、

「あッ。」と言つて、ねえやと二人で、往来へ下りていきました。

二人は一本足の兵たいを一生けんめいにさがしました。兵たいは二人のぢき足もとに落ちてゐるのです。二人はもうすこしでそれをふみつけるところでした。それでもとう／＼その兵たいが見つけ出せませんでした。一本足の兵たいは、

「もし／＼、こゝにゐます。こゝに」と泣き声を出しかけました。しかし軍服を着た兵たいが往来で泣いたりしては見つともないの
で、むりにがまんして、口をくひしばつてゐました。そのうちに

ふと雨がばら／＼落ち出しました。間もなく雨はざあ／＼と、どしやぶりになつて来ました。

その雨がやつと上ると、小さな男の子が二人とほりかゝりました。

「あゝ、あすこにあんな兵たいが落ちてら。あれをボウトに乗せて走らしてやらうね。」と、二人はかう言つて、さつそく新聞紙ををりたゝんで、小さなボウトをこしらへました。

往来のわきのどぶには、泥どろの雨水がどん／＼流れてゐました。

二人の子どもは、紙のボウトへ一本足の兵たいを乗せて、それをどぶへ流しました。そして二人で手をたゝきながら、わい／＼言つて、ついて走りました。水はすばらしい勢いきほひで流れました。とき

／＼大きな浪が^{なみ}づしんとゆれました。そのたびにボウトはくるくまはつて、今にもひつくりかへりさうになりました。一本足の兵たいはびつくりして、ぶるくふるへてゐました。しかし兵たいですから、がまんして、こはいなぞといふことは顔色にも出さないで、ちゃんと鉄砲をかついで、一つところをにらみつけてゐました。

そのうちに、ボウトは、急に地面の下のトンネルの中へかけこみました。そこはまるで箱の中にはいつたやうにまつ暗でした。ボウトはその暗がりの中を、浪にもまれてどんく走つていきました。

「おやく、一たいどこへもつていかれるんだらう」と、一本足

の兵たいはびく／＼しながら乗つてゐました。

「これもみんなあの黒鬼がさせたことだ。ほんとにあいつはひどい奴だ。^{やつ}あの踊^{をどり}の女の人と二人で乗つてゐるのなら、この暗がりがこの二倍暗くても平氣なんだけれど。おつと、あぶない。おゝ、もう少しで引つくりかへるところだつた。」

一本足の兵たいは青くなつてちゞこまつてゐました。すると、ふいにその地の底のどぶの中に住んでゐるどぶ鼠^{ねずみ}が、

「おい、兵たいまで。」と、どなりました。

「こらく／＼通行券を見せろ。おいこら、通行券を見せろつてば。」しかし一本足の兵たいは、だまつて鉄砲の台をにぎつてゐました。ボウトは、かまはずどん／＼走つていきます。鼠^{ねずみ}は怒つて追

つけて来ました。

「おゝい、あいつをつかまへてくれ。つかまへてくれ。通行税をはらはないでにげたんだ。通行券なしでとほつたんだ。」

鼠はかう言つて、ボウトのそばを流れてゐる、木の片きれやわらくづにかせいをたのみました。

さうかうしてる間に、流れはいよゝゝ急になつて来ました。ボウトは目がまはるほど早く走りました。と、やがて向うに外の明るみが見え出しました。一本足の兵たいは、

「おや、うまいぞ。もうあかるいところへ出たぞ。」と思ふとたんに、ごうくぐくと、耳がつぶれるほどの大きなひゞきがつたはつて来ました。それは、どぶがもうちきおしまひになつて、下

の大きなほりわりの中へ、泥^{どろみづ}水がどうと落ちこむ音でした。

そこへ来ると、水は大きな滝^{たき}になつて、まつさかさまに落ちこんでゐました。兵たいのボウトは、あつといふ間にその滝のま上へ来て、泥水のしぶきと一しよに、どぶんとほりわりへさかおとしに落ちこみました。兵たいは、びしやりと水をかぶつたと思ひますと、うづにまかれて、くるくるくと、まはり花火のやうにまはりました。

兵たいは息もつけないで、一生けんめいにボウトにかぢりついてゐました。と、たちまちボウトの中へは水が一ぱいはいりました。兵たいはびつくりして、からだをのし上げてゐますと、ボウトはそれなりぶくぶくとしづみかけました。水はもう兵たいの頭

の上まで来ました。兵たいの目にはもう二度と見られない、あの踊の女の人の顔が浮びました。と思ふと、どこからか、

「ぶくくぶくく、

どんくしづめよ。

死ぬんだく、

ぶくくぶくく。」

と、だれかゞ、うれしさうにうたつてゐる声が聞えました。

そのはずみに、もうどろくになりかけた紙のボウトは、ふいに二つにとけ割れました。

兵たいは、それと一しよに、ぶくくと泥水の下へしづみました。するとそこへ大きな魚がひよいと出て来て、兵たいをがぶり

と一のみにのみこんでしまひました。一本足の兵たいは、

「おや、へんなところへ来たぞ。」と思ひました。

そこは、さつきのトンネルの中よりももつとく暗いところでした。そして足や鉄砲がそこいらへつかへて、きゆうくつでした。しかし兵たいは、どうなりと勝手になれと、もう度胸をすゑて、鉄砲の台をかたくにぎつたなり、からだをつきのばして、ふんぞりかへつて寝ころんでゐました。

魚は兵たいを飲みこんだまゝ、そつちこつちと、いきほひよくはねまはりました。

兵たいはどれだけの間さうして寝ころんでゐたでせう。しまひに、上からばたんとなぐりつけるやうなひゞきがつたはりました。間もなく、いなびかりのやうに、目の前がぱつと明るくなりました。それと一しよに、だれか女の人の声で、

「あら、こんな兵たいがはいつてゐた。」と、さもめづらしさうにさわぎたてました。それは或^{あるうち}家の女の料理人でした。

魚はいつのまにか漁師のあみにかゝり、市場へ売られて、しまひにこの家の台所^{うち}へ来たのです。女の料理人は、笑ひながら、その一本足の兵たいを、おや指と人さし指でつまんで、ほかのお部

屋へもつていきました。みんなは、わい／＼言ひながら、そのめづらしいほり出しものを見に来ました。一本足の兵たいは、きまりの悪い顔をして、されるまゝになつてゐました。

そのうちに、だれかゞその兵隊をテーブルの上へおきました。

兵隊はそつとあたりを見まはしました。

すると、ふしぎなこともあればあるものです。そのテーブルはこの一本足の兵たいが先にのつかつてゐた、あの同じテーブルではありませんか。

むろん、部屋も同じ部屋でした。それから同じ坊ちゃんがそばにゐました。そしてテーブルの上には、先せんと同じ仲間が、ちやんとそのまゝそろつてゐました。踊をどりの女の人はやつぱり同じやうに

入口の石段の上に立つて、両手をたくさしあげて、一本足で踊つてゐました。

一本足の兵たいは、うれしくてく、思はず錫すずの涙がこぼれさうになりました。でも兵たいですから、涙なんぞを見せるわけにはいきません。一本足の兵たいは、だまつて、ぢいつと踊をどり子の顔を見てゐました。踊の女は何にも言はないで、だまつてこちらを見てゐました。

そのうちに坊ちゃん、ふいにその兵たいをつかんで、いきなりストーヴの中へなげこんでしまひました。兵たいは、

「あつ。」とびつくりしました。これもやはりあの黒い鬼のさせたことにちがひありません。兵たいはだまつてちつとしてゐまし

た。

でも赤焼けになつた石炭の中へなげこまれたのですから、たちまちじりじりと、からだ中が焼けたゞれて来ました。兵たいの顔色はまつ青になつてしまひました。

「あゝ、とうとうこれなり焼け死ぬのか。」と思ひながら、向うのテイブルの上の踊の女の人を見つめてゐました。踊の女の人も、ぢつと兵たいを見てゐました。

と、坊ちやんはふいに踊の女の人を石段の上からひつpegして、いきなり、また、ぽんとストーヴの中へなげこみました。女の方はづしんと一本足の兵たいのそばまで来たと思ひますと、たちまち頭から足の先まで、ぼうぼうともえ上つてしまひました。

あくる朝、女中がストーヴの灰をかきに来ました。するとその灰の中から、ハートのやうな形をした錫すずのかたまりが出て来ました。それからまつ黒こげになつた、ばらの飾りのボール紙も出て来ました。その黒こげのボール紙は、あの踊の女が、きのふまでこの世にゐたといふ、たつた一つの上りしでした。

青空文庫情報

底本：「日本児童文学大系 第一〇巻」ほるぷ出版

1978（昭和53）年11月30日初刷発行

底本の親本：「鈴木三重吉童話全集 第三巻」文泉堂書店

1975（昭和50）年9月

初出：「赤い鳥」赤い鳥社

1919（大正8）年5月

入力：tatsuki

校正：伊藤時也

2006年7月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

一本足の兵隊

鈴木三重吉

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>